

# LIBERTINES

MAGAZINE

Magazine of New Liberal Arts

リベティーンズ

August  
2010  
No. 2

## Shop Culture 2010

特集：カルチャーは店頭から生まれる  
～FREE時代の今行くべきお店案内～

伊勢谷友介が

**PASS THE BATON** でモノを売る理由

永井一正 / 津田大介 / 満島ひかり / 辻川幸一郎 / 水野学

ロング・インタビュー：コンドルズ 近藤良平 芸術と笑いの間

作家、かく装う：東浩紀、平野啓一郎、町田康

話題の書き手40名によるレビュー40ページ

みかんぐみが、鹿児島市の百貨店を大規模にリノベーションしたと聞いて、見に行つて来た。果たして、地方の百貨店がデザインで復活できるのか？それが興味の中心。僕は今、山形や福岡、金沢などでR不動産をやっている。日本の地方都市の現実を見ているからだ。地方都市の百貨店は、どこも窮地に陥っている。鹿児島市のど真ん中にある三越も、2年前に撤退した。業態としては時代とズレ始めた百貨店だが、それでも街の中心機能たりにえている。例えば、伊勢丹や三越がなくなった新宿を想像すれば、それが地方都市で起こった場合のインパクトが推し量れるだろう。

鹿児島市の中心で、三越以前に百貨店を経営していた老舗「丸屋」が、建物を引き継ぎ、営業を再開したのが、この「MARUYA GARDENS」。一見、無謀にも見える経営判断。しかし、訪れてみた空間は、百貨店とは違う、何か新しいビルディングタイプだった。みかんぐみが建築設計、ナガオカケンメイがサインやインテリアを含めたアートディ



鹿児島・天文館の丸屋本店が、2010年4月28日にグランドオープン。建築、デザインのリニューアルと共に、店舗も約50%が九州初出店のテナントとなった。  
www.maruya-gardens.com/

## MARUYA GARDENS

鹿児島から、新しい公共空間への仕掛け

★ ★ ★ ★ ☆

レクシオン、山崎誠子がファサードのランドスケープ、山崎亮がコミュニティデザインを担当している。このチームアップが功を奏しているように見える。

内部を歩く感覚には微妙な違和感があった。空間の広がりやエスカレーターの風景は、やはり百貨店のフォーマットを色濃く残している。しかし、天井の設備やスラブは露出、床は荒いフローリング、白々しい蛍光灯ではなく、暖かみの色調が選択されている。グラフィックも手書きでランダム、いわゆる「百貨店の記号」が丁寧にすべて消してあるのだ。特に違和感が際立っていたのが、各階の所々に「空き地」があることだった。収益を上げるため重要な床面積を、無目的な空間として公開している。「MARUYA GARDENS」の「GARDENS」は、この複数の「空き地」が点在していることに由来する。そして、この「空き地」に、公共という概念に対しての、ある問題提起が仕掛けてあるのに気がついた。例

えば、都市のなかの公園は役所が「支配」し、その使用方法を厳しく制限する。公共を役所の私有地と勘違いしているのだ。それは管理という名目の支配。「GARDENS」は私有地だが、それを公共空間として位置付け、プライベートな敷地のなかにパブリックを埋め込む実験を行っている。劣化した行政に「本来の公共性」を問いただすより手っ取り早いし、現実的なアクションだと思う。

フランスの哲学者・社会学者のアンドリュー・フューブルは「空間の生産」の中で、同質化され断片化された商品としての空間、つまり資本主義の理論のみでつくられる空間を「抽象空間」と呼び批判した。そこには常に空間を管理する側の理論が優先され、それは本来、空間が持っているなければならない身体的なリアリティが欠落していると指摘した。

「MARUYA GARDENS」の試みは、商業や行政の合理性によってかき消されて行った、本来的な意味での「公共空間」を再定義し、存在の在り方を問い直すという実験である。

(タグ)

地方都市/リノベーション/百貨店的記号/「公共空間」の再定義/空き地/コミュニティデザイン

馬場正尊



ばばまさたか：1968年佐賀県生まれ。早稲田大学大学院建築学科修了。博報堂、雑誌「A」編集長を経て、Open Aを設立し建築設計、都市計画、執筆などを行う。また不動産サイト「東京R不動産」を運営。著書に『新しい郊外』の家。